



考古学財団

おだわらじょうさんのまるすぎうらへいだゆうていあと

小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第V地点（小田原市No. 228）

所在地 小田原市本町一丁目 138 番 12
 期間 令和元（2019）年 7 月 16 日～
 令和 2（2020）年 3 月 31 日
 調査面積 669㎡（A区 584㎡・A区② 9㎡
 B区 29㎡・J区 4㎡・K区 43㎡）
 担当者 絹川一徳・高橋 香
 調査概要

小田原城は伊勢宗瑞（北条早雲）を初代とする小田原北条氏の拠点となった城郭で、豊臣秀吉との小田原合戦（1590 年）に敗れた北条氏が開城したのちは、徳川家康の支配地となり、家臣の大久保氏が城主として入城しました。その後、家康が江戸幕府を開くと、小田原城は関東の西の抑えとなる拠点として重視され、幕府直轄の大改修によって石垣と堀、瓦と白壁の塀や櫓で囲まれた今日のような近世城郭へ生まれ変わりました。

調査地のある小田原城三の丸は、堀と土塁、城壁で区画された城内の範囲で、江戸時代には小田原藩の重臣の武家屋敷や藩校や御用所などの藩施設が配置されました(図1)。遺跡名の「杉浦平太夫邸」は、江戸時代の終わり頃に描かれた城絵図に記された人名の屋敷で、「杉浦平太夫」は大久保氏小田原藩の城代家老を代々勤めた重臣でした。

今回の調査では、小田原城に係する小田原北条氏が城主だった戦国時代や江戸時代の遺構や遺物だけではなく、弥生時代から近代にいたる様々な時代の遺構や遺物が見つかりました。

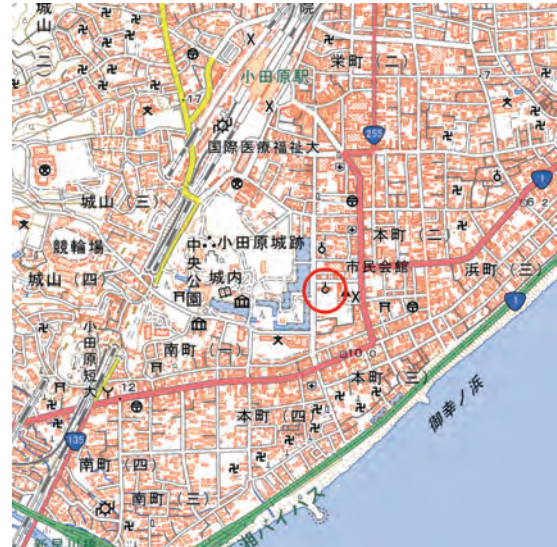


図1 調査地の位置（1/25000）

以下、おもな時代の調査成果を紹介します。

(1) 近代 太平洋戦争時に掘削された防空壕と大正時代にこの場所にあった第二尋常高等小田原小学校に関わる遺構を検出しました。それぞれ近代都市小田原の歴史を伝える資料となりうるものであったことから、出土した遺物のうち、保存状態が良好なものを取り上げて記録しました。

(2) 近世 近世の地層の大部分は、寛政 10 年（1633）に始まった江戸幕府の小田原城大改修で造成した盛土が主体で、その後も江戸時代を通して何度か盛土がくり返されていました。今回の調査ではこうした盛土の単位を手がかりに、17 世紀初頭から 19 世紀中葉にいたる 5 時期の遺構面を検出しました。

このうち、2c 層（近世 3 面）検出遺構は、元禄 16 年（1703）に発生した元禄関東地震が原因となり、小田原城と城下に甚大な被害をも



写真1 大火で捨てられた陶磁器類（南東から）



写真2 火を受けて変色した瀬戸・美濃焼皿（東から）

たらしした小田原大火の直後で18世紀前葉の遺構が中心です（図2）。大火の後、後かたづけのために池跡を掘り返した土坑に捨てられた焼土には、炭化した材木片とともに割れて碎けた陶磁器などがたくさん含まれていました（写真1）。また、陶磁器の一部は火を受けて変色していました（写真2）。

いっぽう、被災後に屋敷の諸施設を復旧するなかで、屋敷の北側を巡るように石組み溝と貯水地が新たに構築されていました。

石組み溝は、幅1.3mで両側に自然礫や割石を並べて側石としたもので、底には径10～15cmの玉石が敷かれていました（写真3～5）。溝はA区の中央付近では東西方向へ直線状に配置（写真3）され、いちど南西方向へ屈曲（写

真4）させたのち、A区の北西で再び東西方向へ直線状に配置（写真5）されていました。また、この石組み溝には石製の樋門が設けられていました（写真6）。樋門は風祭石（箱根の溶結凝灰岩）を幅70cm、高さ40cmの凹字形に加工したものです。

さらにA区の中央東寄りでは、この石組み溝に連結する貯水地とみられる方形の石積み遺構を検出しました（写真7）。南北約4.8m、東西約2.2m、深さ約1.0mで、北西隅の開口部が溝と連結しています。石列は奥壁の南側が4段積み、それ以外は2段積みです。埋土には腐植した泥土がほとんど見られないことから、常時滞水していたようです。防火用の貯水地であったかもしれません。

3a-1層検出遺構（近世5面）は、寛永10年に始まった小田原城の大改修で造成した盛土の直下で検出された17世紀初頭～前葉の遺構群です（図4）。礎石建物跡、柵列、集石、溝、土坑、柱穴、ピットなどの遺構が見つかりました。遺構は埋めた土の違いで2つのグループに分けることができました。ひとつは寛永10年の工事が行われる直前の遺構（17世紀前葉）で、東西方向の杭列を検出しました。第二のグループは17世紀初頭～前葉の遺構と考えられます（図3）。

A区北西では、後者のグループに属する遺構として南北2間以上、東西2間で底付きの礎石建物跡を検出しました（図3・写真8）。建物跡の一部は調査区外の北側に広がっていて全体が確認できませんでしたが、おそらく四面に



写真3 玉石が敷かれた石組み溝 (A区中央：東から)



写真6 石組み溝に設けられた樋門 (東から)



写真4 石組み溝の屈曲部分 (A区中央西：北東から)



写真7 貯水地とみられる方形石積み遺構 (北から)



写真5 側石が抜き取られた石組み溝 (A区北西：東から)
底がある礎石建物であったと考えられます。建物の東側と南側には底に沿った雨落ち溝とみられる幅0.3～0.4mの素掘りの溝も見つかりました。

(3) 中世 3a-2層から3c層下面にかけて4時期の遺構面を検出しました。おおむね16世紀前葉～末までの約百年間で、小田原北条氏が



写真8 底付きの礎石建物跡 (南から)

5代にわたり小田原城主だった頃の遺構です。

このうち、3a-2・3b層で検出した遺構は最も新しく、おもに16世紀後葉～末のものです(写真9)。A区全域において方形竪穴遺構(写真10)、井戸、礎石、石列、集石、溝、土坑、ピットなどを検出しました。とくに注目すべきは、これらの遺構のいくつかと地層に含まれて多量

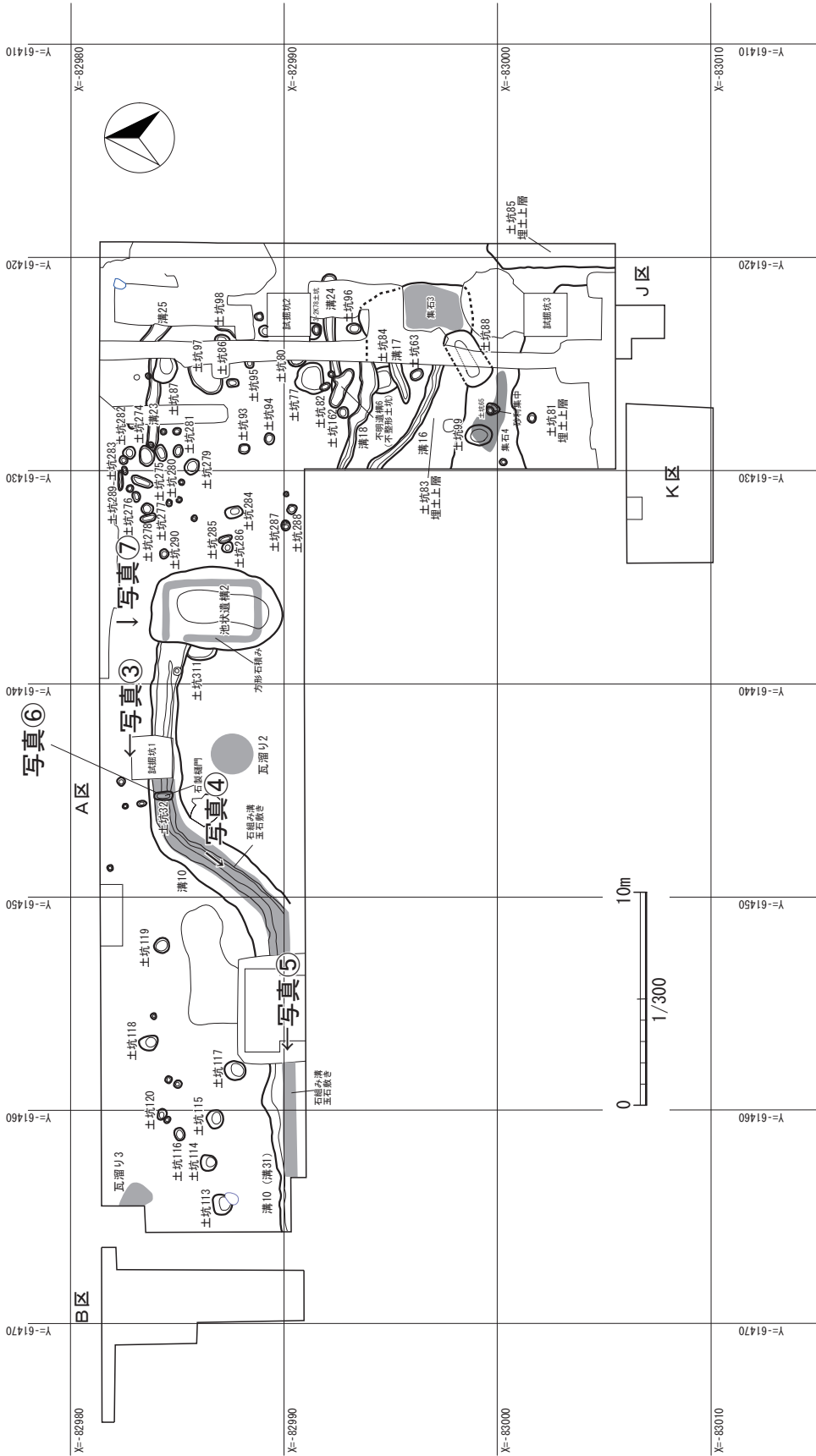


図2 2c層検出遺構(近世3面)平面図



写真9 A区中央3a-2層検出遺構(中世1面:東から)



写真10 方形竪穴遺構(A区3c層検出遺構:南西から)

の鉄滓とともに凝灰岩製鞆羽口(写真11)や銅鉍滓が付着した土師器のトリベ片(写真12)などが多数出土したことです。鉄滓と鞆羽口は鉄精錬が、銅鉍滓が付着したトリベは銅製品の鑄造がそれぞれこの場所で行われていたことを示しています。また、トリベの大半はかわらけ(小皿)を転用したもので、かなり小さな銅製品を鑄造していたようです。

(4) 弥生時代～奈良平安時代 5層検出遺構として奈良・平安時代の南北方向の溝1条が、6層検出遺構として古墳時代の溝、土坑、ピットがそれぞれ認められました。また、6層ではA区中央東で古墳時代前期の土師器高杯、壺などがまとまって出土しました。7層検出遺構はA区東側で溝、土坑、ピットが認められ、とく



写真11 鉄精錬に用いられた凝灰岩製鞆羽口



写真12 銅製品の鑄造に用いられたトリベ片

にA区南東側に集中して弥生時代中期の宮ノ台式土器の細片が出土しました。

まとめ

今回の調査では、江戸時代の小田原城三の丸にあった杉浦平太夫邸跡に関わる遺構、さらに寛政の小田原城大改修の直前に解体された可能性がある庇付き礎石建物などを検出しました。また、16世紀後葉～末の遺構などから出土した多量の鉄滓や鞆羽口、銅鉍滓が付着した土師器トリベは、戦国時代の小田原城三の丸で盛んに鉄精錬や銅製品の鑄造作業が行われていたことを示しています。これらの遺構・遺物の存在は、戦国～江戸時代の小田原城における三の丸の土地利用の変遷を考えるうえで重要な手がかりを与えてくれそうです。(絹川一徳)